

『約束の地へ』 (要旨)

聖書箇所：マタイ 2:13～23

【1】ヘロデが信頼したもの

「ヘロデは、博士たちに欺かれたことが分かったと激しく怒った…ベツレヘムとその周辺一帯の二歳以下の男の子をみな殺させた。」 (2:16)

ヘロデは「ユダヤ人の王」(2:2)誕生の話を聞き、人口300人とも1000人とも言われる小さな村ベツレヘムの2歳以下の男子を皆殺しにしました。しかも念入りに「周辺一帯」という命令を添えて、「なぜ我が子が殺されなくてはならないのか!!」むせび泣きと嘆きがベツレヘム中に聞こえたことでしょう。

博士たちはこうしたヘロデの残忍さを知らず、旅の中で自分たちが知り得た情報を伝えていました(2:7)。そして幼児イエスとの謁見後、ヘロデのもとに戻る予定でした。ところが主の使いの警告があり、彼らは別の道で自分の国に帰りました。

ヘロデはローマ皇帝の支持を見事に勝ち取り、ユダヤ人の王に任命された人物です。そうしたヘロデにとって、東方の博士たちに友好的に関わることはたやすかったです。彼は博士たちから幼子イエスがいる場所を聞き、その場所を特定する予定でした。しかしその思惑が外れました。当初、隠密に「ユダヤ人の王」の芽を摘む予定でしたが、それが適わないとわかると、残忍な一面を隠さず、僅かな可能性も残さぬよう虐殺を命じたのでした。

▶ヘロデは自分の考えた通りに物事を動かすことができると考え、自分に信頼を置きました。

【2】ヨセフが信頼したもの

ヘロデは博士たちを自分のコマのように動かしているつもりでした。しかし博士たちが予想外の行動をとったことに気づき、「欺かれた」(16)と激しく怒るのでした。博士たちは器用にヘロデを欺こうとしたのではなく、主の使いの「警告」を受けて自分たちの行動を変えたのにすぎません。しかしヘロデは神が介入して博士たちの進路を変更させたことなど思いもしませんでした。

さて博士たちに指示を与えた神は、ヨセフに対してもヘロデの陰謀を知らせ、エジプトに逃れるように命じました。「立って幼子とその母を連れてエジプトへ逃げなさい。そして、私が

知らせるまで、そこにいなさい。ヘロデがこの幼子を捜し出して殺そうとしています。」(13)

ヨセフは主の使いの言葉を聞いた時に、迷わず「夜のうちに幼児とその母を連れてエジプトに逃れ」(13)しました。その後も主のことばに対して従順でした。

▶星を見て旅をした博士たちは幼児イエスを礼拝した後、主の使いの「警告」を聞き行動しました。ヨセフも神のことばに信頼して従いました。

【3】約束の地へ

「ダビデの子ヨセフよ、恐れずにマリアをあなたの妻として迎えなさい」(1:20)

この日以来、ヨセフは自分の計画を超えた出来事に次々と遭遇します。そして無名の大工が、膨大な資金、あらゆる情報、そして強大な兵力を有する王に狙われることになったのです。もはや絶体絶命です。それにも関わらず、策士ヘロデですら予想もしなかったエジプトへ逃れました。着の身着のままの緊急脱出を支えたのは、博士たちの贈り物(黄金、乳香、没薬)だったでしょう。

ヨセフはヘロデを恐れ「エジプトに逃れ」(14)しました。ヘロデの死後も残忍なアルケラオがユダヤ地方を継いだことを恐れ、ガリラヤ地方の「ナザレ」に住みました(22)。ヨセフは家族のいのちを守るための行動をし、時の権力者に向こう見ずな戦いを挑みませんでした。しかし彼は理不尽と思われる出来事に遭遇しても、神のことばに信頼を置き行動しました。

マタイはこうした一連の出来事を神の約束の成就とし、神の救いの代名詞である「出エジプト」になぞらえるのでした。かつてモーセに率いられた民がエジプトを脱出したように、今イエスがエジプトを出て、「約束の地」に入ったのだと(ホ7 1:1, マイ 2:21)。

▶私たちは自分に理解できないこと、受け入れ難いことに直面することがあります。しかしそのただ中で語られる神のことばに信頼を置き、今日自分がなすべきことと誠実に向き合うことができますように。

